

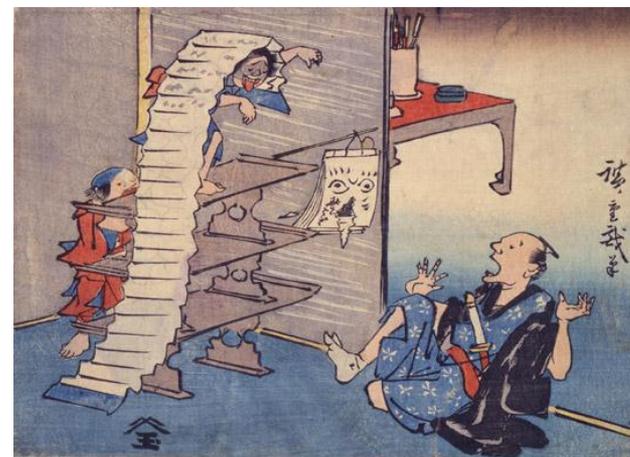
○弥富市六條新田(黒宮重佳記念碑銘 黒宮砂郊)

『弥富市史料部』報告書

隨林玄教堂而專学字好俳句...

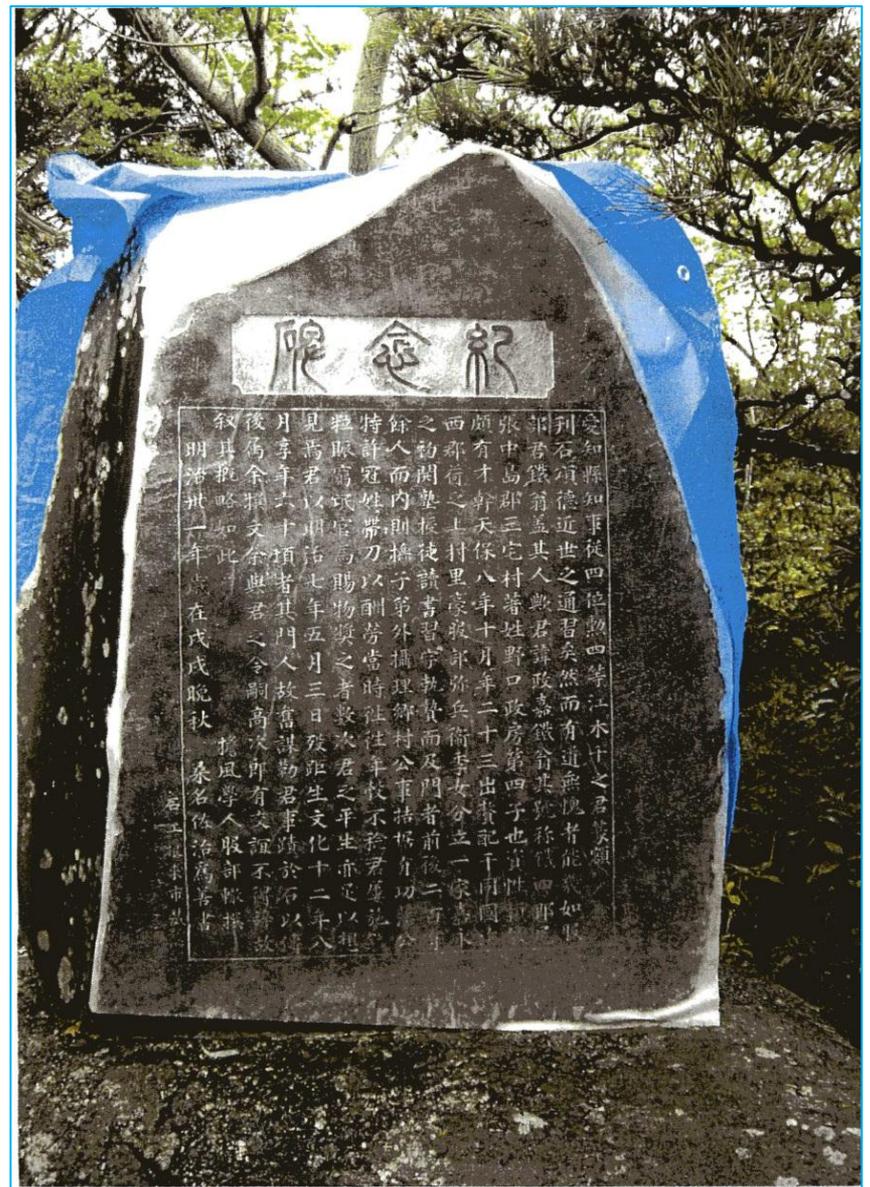
明治二十八年4月建立

松名、寛延、鎌島、政成、大寶、
鳥ヶ地、子宝、神戸、竹田、西蜆、
東蜆、坂中地、服岡、平島、中山、
津島町、佐屋、次賀、福田、名古屋
市、桑名町、大阪市、美濃池、
東京市、六條、大野、戸田など
27ヶ所の地名と165名の門
人名が記されている。十世黒宮
保則の名前が代表。



人物伝⑥ 服部鐵四郎

嘉永之初開塾授徒讀書習字執贄而及門者前後二百有餘人而内則撫子第外攝理鄉村公事拮据有功藩公特許冠姓帶刀以酬勞……

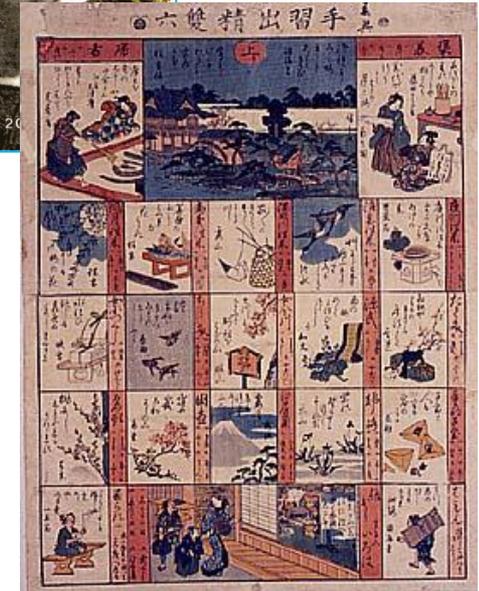
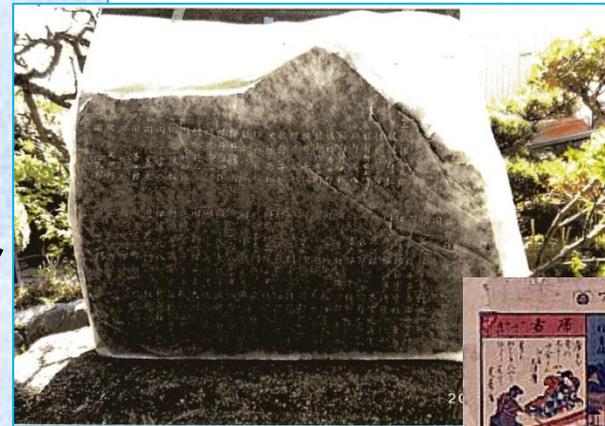


発起人

服部弥兵衛 服部定八
服部定蔵 服部長右工門
服部久三郎 服部佐左工門
服部治朗右工門

荷之上 40人 五之三20人
子宝 1人 柏原 1人

鯛浦 4名 大阪・桑名・四日
市・横浜・草津・西京・東条 各
1人 ナゴヤ 3名 長島 2人
西保 2人 百保 4名



人物伝⑦

一光堂五雲(山岸儀右衛門)

山岸五雲(儀右衛門)は寛政四年、東条勘右衛門の長男として生まれる。幼児より読書習字を好み、俳諧にすぐれていた。子どもたちの教育にあたり、文化6年間～明治にいたるまで、四十余年の長きに渡って寺子屋師匠を務める。明治元年、77才で死去。



山岸五雲肖像

「あわれさや 花を残して 帰る雁」(十分花を楽しむことなく、この世を去っていくのは、渡り鳥の雁と同じ)

句碑は明治23年建立。

「何事も浮世思えば夢の夢

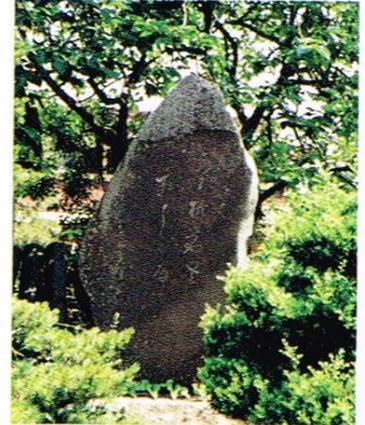
南無阿弥陀仏に うへこすはなし」

文久四年(1864)の元旦。肖像画に添えられた歌。軸の上段に津島市・成信坊住職正定院制心の五言絶句。

善書教不倦
最工詠俳諧
老来両抛捨
一向念弥陀

書を善く教え倦まず
最も工に俳諧を詠む
老来両(ふたつ)ながら ほう捨
一向弥陀を念ず

山岸半七氏



人物伝⑧ 大錦大五郎

生年 1883年

弥富市稻元

小さい頃から力が強かったの
で、子どもたちの相撲大会に
出場し、年上の子どもたちにも
負けませんでした。

稲元の金太郎と呼ばれました。

大坂相撲 江戸時代～大正
時代 18世紀後半までは江
戸相撲を凌ぐ人気があった



大五郎 (金太郎)



- ・このうわさを聞きつけた元関取飛石山のすすめで、京都相撲に入門しました。
- ・のちに大阪相撲に移り、大正7年、第28代横綱「大錦」となりました。
- ・左四つ両まわしを引くと大変強かったそうです。

1906年 十両筆頭

1918年 横綱

1922年 引退

「土俵にあがった時の
美しさは満点」と言われ
ました。



大錦のうちわ

人物伝⑨

市野 亨 (いちの とおる)

生年 1910年

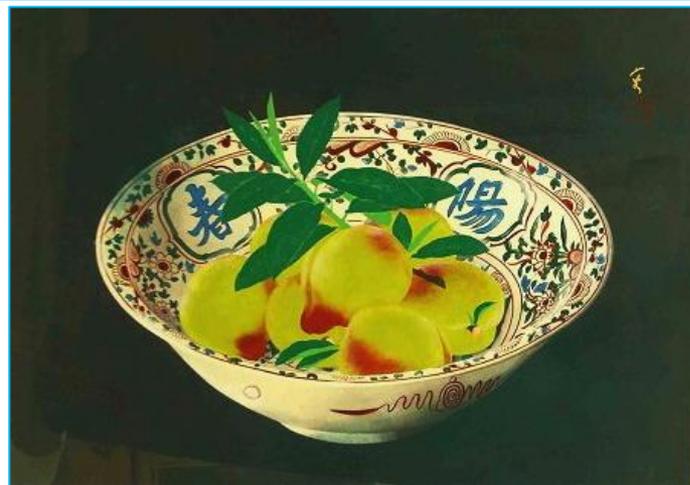
弥富市馬ヶ地

十四山西部小を卒業後、名古屋市内の繊維問屋で働いていました。

画家になりたいという思いが強く、川端龍子の弟子となりました。

Y氏賞、「猛禽舎」奨励賞を受賞。その後「青龍社」社人となり、中部画壇の発展に寄与した。中日文化賞受賞。

市野亨「七彩鳥」



十四山の美しい風景、「花鳥」を好んで描きました。「鳥の市野」とよばれました。

市野龍起は父同様有名な日本画家であり、「鳥の画家」と言われています。鳥にテーマを絞った個展をひらきました。

残念なことに亨の作品は伊勢湾台風で多くが失われましたが、「青々会」という展覧会を通して、若い画家を育てました。



亨
市野
受賞 六十九方 花鳥師 香城・龍子、昭隆社 社五人



人物伝⑩

加藤静児 (かとうせいじ)

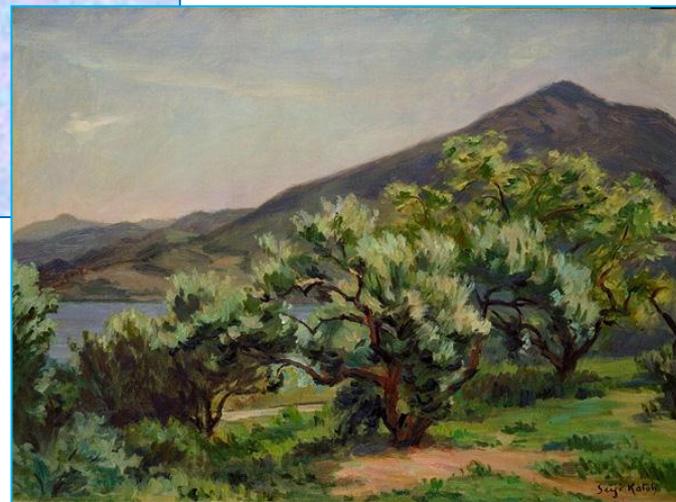
生年 1887年

弥富市六條

旧制津島中学から東京美術学校を卒業

大正から昭和にかけて活躍した洋画家

特に留学中のオリーブ畑は有名



光風会々員。明治20年6月1日弥富市に生まれる。大学在学中から文展に「山かげ」「早春」など作品発表、外遊を経験。昭和5年には帝展に推された。文展以外に光風会に作品を陳べ、そのほか個展を開いた。又愛知社同人として郷土芸術振興に尽力するところがあった。

「愛知社」とよばれる絵の研究会を作り、愛知県の洋画に大きな影響を与えました。



加藤静児は風景と人間の営みを描いた作品に優れているそうです。

人物伝⑪

服部擔(担)風

(はっとりたんぷう)



孝忠園碑

水辺の漢詩人・書家

1867年(慶応3年)弥富市鮎浦の地主の家の次男として生まれる。幼いころから、兄と共に森村大朴に漢文を学び、のちに一宮市の漢詩人森春涛らの影響を受け、名を擔風と改め、漢詩の研究とともに詩作に励み、1891年(明治24年)「梅花唱和(ばいかしょうわ)の詩」を毎日新聞に発表した。その後、詩の講義や詩作の指導に取り組んだ、彼が使用した書齋が藍亭。日本芸術院賞(詩歌)を受賞。



服部担風 中国の詩を研究し、創作した詩人 明治・大正・昭和にわたる弥富の文化人



尾張地方に沢山の門人を持つ。

「擔(担)風詩集」

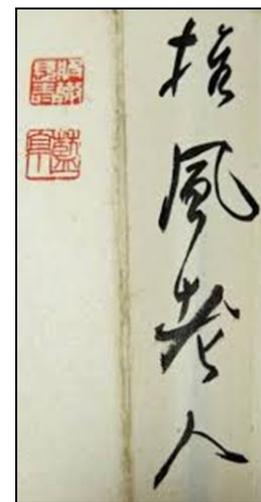
中日文化賞受賞・芸術院賞を受賞

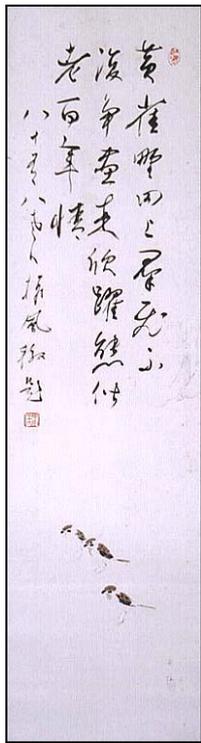
弥富町第一号の名誉町民

弥富を代表する文化人

担風先生を初めて訪ねた郁達夫氏が帰る時、馬車に乗っている氏を、担風先生が歩いて駅までずっと付いて来たことが蝶如氏著の『服部端部宇先生雑記』に載っている。担風先生は、普通では考えられないくらい素朴で実直な方であった。

郁達夫氏から、自身の父親のような存在で、特別な気持ちがあった。





郁達夫(いく たつぷ、1896 — 1945)、達夫は字で、本名は郁文(いく ぶん)である。中国・浙江省出身。中国近代の小説家・詩人(漢詩)である。服部担風と深く交わる。

担風は一宮の森春濤の弟子。愛知県全域に沢山の弟子を持ち、加藤唐九郎をはじめとして多くの文化人と交流していました。

